



# LIBRARIES

UNIVERSITY OF WISCONSIN-MADISON

## 蝦夷風俗彙纂 = Ezo fūzoku isan. [Series 2, vol. 5] 1882

[s.l.]: [s.n.], 1882

<https://digital.library.wisc.edu/>

<http://rightsstatements.org/vocab/NoC-US/1.0/>

The libraries provide public access to a wide range of material, including online exhibits, digitized collections, archival finding aids, our catalog, online articles, and a growing range of materials in many media.

When possible, we provide rights information in catalog records, finding aids, and other metadata that accompanies collections or items. However, it is always the user's obligation to evaluate copyright and rights issues in light of their own use.

蝦夷風俗彙纂後編

五

CHESTER S. CHARD



蝦夷風俗彙纂後編卷五目次

○伎藝の事

弓術の事

馬術の事

幼女砂地よて物習ふ等の事

○遊戯の事

五弦琴を彈はる事

ムツク事といふ戯の事

唄の文句の事

ユウカルの事の事

浄瑠璃とわかる事

踊の事

狐踊の事

一千里の事

舞の事

戎舞の事

槌打鶴舞の事

又ハロシノ千の事

○ 対アカミ千ウの事

舞臺風俗ニイホケの事

源氏物語 十シ、ユエの事 六  
緒

テリケの事

目次

後卷五

二

蝦夷風俗彙纂後編卷五目次終

蝦夷風俗彙纂後編卷五

の

の

の

の

の

の

の

の

の



づりて毒とぬりつけ。おれを射るは知らぬ事もなく。  
 腰みて中だめよしして發つ。をづる事なし。大かこ  
 を。うしろ向よし。ふりかへりて發つ事なり。又がねを  
 てつくれる。鏃をとたしぬ。秘藏せり。是冬出。又や荒  
 砥よし。よく作りおろして。かくしものなり。  
 蝦夷地よし。熊鹿狐の類を甚多し。夷人どもつねに犬  
 を飼置きて。右獸類を獵する時。ひきつる事なり。  
 獵具を多く弓矢と携るのみ。夷人を天然よしして。射藝  
 よし。妙を得たるものなり。つねに射的などの稽古とい  
 ふ事もなくして。おのづから妙よし至る。百たび發つ。

百度阿さり。猛き熊をち。弓よて射とむるなり。尤矢尻  
よる。毒をぬりて射る事なり。此毒をブシといふ。是は  
あいちトグキ此矢といふものなるべし。俗は是をブ  
シ矢といふ。又御曹子嶋渡といつるものよ。ブシ矢と  
をめてなどく見えたり。たぐ此えびは鳥此羽はく  
きよ。附子といふ毒をぬりて。鎧はあき間ををりりて  
射るといひり。此毒をバ附子矢といふなりとち見え  
たり。又左京太夫顯輔此集よ。  
よ津ま川やふ島此えぞ此つくるなるち。四又よよ  
あ入ふふふふとくき此矢こそひまふとるあれ

蝦夷人も弓とハグと名づけ。弓弦此事をバア井といふなり。棋楠樹をてつくるなり。弓の長さ四尺むらりよして。處々を樺皮よて巻つくるなり。鏃を添根よして。おまよ毒伐ぬる。原巻よて廣五分むらり。根を鹿此角よて作る。矢此長さを一尺二寸むらりよして。太さを廻り一寸むらりなり。鷓此羽あるひを鷹鷲なとの羽よてもぐ。尤四つ羽あるひを二つ羽よてもぐ事あり。矢筒をムイカウと名づくるなり。長さ一尺七八寸むらりよして。獸此皮よて上下伐つむ。中を木地よして彫物あり。但し裏よえなし。鏃を残らぬ。白目流し

を用る事なり。北海隨筆

蝦夷國よて弓矢を翫ふ事。其かくきれしといへども。日本此弓矢此形と。小大ひよ相違せり。弓を棋楠樹といふ木よて作る。其長三尺七八寸おして。木此廻り二寸六七分。上下を少し細く削りて。弦物をきざみつけ。木の皮此細きものよて。巻つめたるも有り。その中せきよを矢持許ふ。少し高く削りつけたるものなり。弦を蔓草の皮線とり糸よよりて。鯨此油を幾度ちひきて干たるも此あり。扱まふ矢此長一尺二三寸。太さ一寸廻りおして。サルマニといふ木なり。羽根を二枚を

ちつて四枚羽と造る事なり。是を羽のくきを立割よして。矢がらよ付るゆ急よ。一枚此羽根二枚よなる事なり。矢此根を鹿此骨よて仕こみ。其鏃よまよ竹此矢りとると仕付たるものなり。これよ彼毒とぬりて禽獸を捕る事なり。矢此羽よを鷺鳶嶋ふくろよなどの羽を用ふ。矢羽甚せばくして四分許り。羽の長さ三寸四五分とかぎりとは。木の矢筒長さ一尺七八寸。さしよし二寸四五分。木此皮よを獸此皮よて丸く製りて。か此アツシ此糸よて悉くからみつけて。肩よかける布此なり。かく此よとく其道具何らくありて。幼

き時より射藝を習ふ事。實よけあげある事どもなり。  
稽古の矢を竹の鏃を用ひず。唯矢柄木に根も鹿に足  
骨を付たるも此なり。その習方様々あり。木に枝も帆  
立貝をつり置。其貝は射割るともつて本意とし。又木  
に枝の志をやあふるると丸く引ゆるめ。輪的を製しこ  
れと持。平らなる地へ出て。一人彼輪的となげ出さ。其  
ころび行を射。勝負はあらそふ業あり。その修行つも  
りてを。小き輪的もてを。法ひも射をづ事なし。まし  
て精心至るも及びてを。禽獸はぶとき象に大なるも  
のハ心易く射留る事となり。唯此道一心も通して。心

術は妙と得る時を。その不思議なしといふべからず。  
あゝよ。日置流弓術の達人不破某が。常は門弟子に向  
て曰く。凡弓は携へて右は手とちつて臍は邊と撫た  
るを。心氣と治めん爲なり。二本は矢をとりて。一本指  
よをさむといへども。必後此矢と頼とせざ。唯其先の  
一筋は勝負ありと心得て。ゆめく心とゆるは事なる  
れ。一切は稽古かく此ととし。あべて怠る事あはれと  
いへ。實なるらふ。此國弓は手前といふ事なれ  
ば。弓法古實といふ事もなく。唯心とこらし業と修行  
はる事と。肝要としたるものよて。ひたすら弓矢と

持。自由のかけあるき。速く射る術を磨く事なり。見蝦夷

誌

唐太此肉字。カアマナイといはる所は。大木此例逆の。  
アしが。此木を夷人は木幣を立て祭る。又鍊此矢の  
根夥しく刺たり。おれをチトカン又シとをいはす。此  
邊り此土人。弓勢を試んためは。此木此梢を向て放ち。  
其的を何やまさざるものを。生涯如何なる猛獸を逢  
とを。射損さるはとなしと云傳つて立願し。皆試みし  
とりや。今其鏃多く刺しり。チトを射る。カン又シとを。  
當り刺せる譯此よしなり。同所トはチヤ越えるを



あり。まとの口。北北。斜里より根室越等。其餘處  
々みあるなり。唐太日誌

○馬術の事

山路をためておるたみかつる道よて。えぞどもれく  
ちもなき馬みのりて。をしりかふれ見るよつけ。的り  
けて弓をもちさしむるよいと。いさだよし。まとうあ  
をらみ船をうあべて。脛胸臍といふけちれとほくま  
祿をるさま見るよ。ちれふのほく取りてたくりひ  
よのぞめるが如し。堀田正敦陸奥紀行

○幼女砂地みて物習ふ等の事

女夷七八歳の頃より。砂地より出て衣服の文繡を手習  
造。凡女兒を腰より細き緒をまとふ事六重。賤しきもの  
ハ二重なり。其衣服を製するを。アトシカルといふ。ア  
トシをアツトシの略語なり。アツトシを木皮布とい  
ふ名義より。カツフと云木の皮を紡績して。製する所  
此物なり。カルを製造此語。按ずるよりアツを集此意。ト  
シを筋此訛語なるべし。縦横より系筋を何つめたる謂  
からんり。繩の類を造べてトシといへり。蝦夷土産

遊戯

五弦琴と弾する事

苦前のある土人の家よやどりしよ。此家の妻メ一面此  
 五弦琴を弾じてたのしみ々るが。其音幽ユにして頗る  
 雅趣有。唄物をとふフ往古を有しク。今を絶て曲のミ  
 残れりト。余が乞ヒしラば。チカフノホツ鳥音と云と弾せシが。いハ  
 よハ春ハ此百千鳥ハ此轉ると。怪まるク音ハよテ。五弦を十  
 指ハよテ弾ハおハちシろリ乎。此頃楮陰雜録増増鳥蘭と  
園著  
 閱スるハよ。白樂天五弦詩趙叟五弦宛轉當胸撫又云十  
 指無定音。顛倒宮徵羽。近覽屋ハ代ハ弘賢所藏。五弦狀如琵琶  
 而小。短項修柄。云出于蝦夷。夷人每酒酣彈ハ以爲樂。彈  
 之之法。蹲踞承項ヲ于足心。以柄當胸。彈之不用撥。與白詩

所言正合。及讀樂府雜錄。胡部樂有五弦。又唐禮樂志五弦。如琵琶而小。北國所出。則知唐時五弦即是也。蓋唐胡部樂。其從北方者。多出于突厥。唐志所謂北國。蓋亦突厥也。然則此器從突厥流傳于蝦夷。夷人敦樸尚存其古也。又按宋樂志。胡樂有五弦。遼志大樂有大小五弦。金志雅樂亦有五弦。明以後則不見五弦名。と云則是なる大と明あり。天鹽日誌

○ムツクンといふ戲曲の事

夷童亦多夷女。其戲。口琴と云ものとなり。此ムツクンをならせしむ。モンケンウンといふ。糸を左手に

小指よかけ。下のトシといふ糸と。右手は人差指と親指と此間よ狭み。糸を引張て。口此何よりよよせ。息をふきつけ。糸は左右つ引張たり。ゆるめたりしてならはふ。尤もしろき音色出るなり。夷諺俗話

渡嶋筆記よ。ムツクンといふ木の。和人假よ名づけて口琵琶と云り。竹よて作り長さ五寸むりりよして。糸とつけて。其糸は口よ含み。指よて弾し竹をならはすの。みよて歌ふし。是を古來は木のよ何らば。唐太より來るも此なり。尤もよよむムツクン。既よ所々よ何りふれて。今ハ歌うよ曲あり。一人かよそらよ何りて。

立なぶら舞。志うれども歌舞とちよ。曲節と何ぞせむ  
とさるさまよむあらむ。思ひよみぞ見えたる。千島志料

○唄の文句此事

西蝦夷地此宗谷邊にて。土人此風俗と見るよ。遊此座  
興此戲よさる事よて。口よ糸絨加へ手の指の爪よて  
弾きならし。此相手よを團扇大鼓此如き物を打て。拍  
子絨取。そやしよ乗じて諷ふ。歌此章句を翻譯よる事  
左此おとし。

蝦夷國初て開けし時よ。十二一重の美服と着さる  
神と。只一重此麤服を着したる神。天降りける時よ。

美服着る神をバ尊く思ひ。此國も止りたまへと  
祈り尊敬し。麤服を着たる神をバ信せ。近寄らば。  
因て其神天上して。終も再び降り給え。又美服と  
着たる神も此國も止り給ふ。此神も粟稗此神もて。  
麤服を着る神も。米穀の神なりしが。天上し給ひ  
しゆゑ。蝦夷國ハ酷寒の地なれば。十二重此神へ。  
此國も留り給へと祈りしが。糠殻此多き粟稗の神  
とも志らぬ。一重此神も米此神とも志らぬ。夷狄な  
る大そ阿さましとれ。因之蝦夷國も此因縁もて。米  
穀も出來ぬぞ理なる。

此外蝦夷土人同士の物語も。古事來歴をかゝるといへども。身自ら夷狄なる事とをぢ。謙遜して日本を慕ふ意味多し。依之撫育教導し。命令を降せし於て。忽ち良民と化せべき今の時勢なり。此時に乗じて開國此大業を始め置べ。左程世話せざとも。遂に開國成就して。最良國となるを疑ふ事あるべし。此邊ハ唐太嶋此手前にて。唐太島と相對しよき泊りあり。開業成就此上を。繁昌の地となるべき所なり。蝦夷草紙

○ユウカルの事

此國ユウカルといふ遊戯あり。是日本此淨瑠璃と



いふ様なるものにして。剛きと柔きと。たをむれらる  
と。阿われあると。取合せたるものなり。折ふふまでさ  
びしき時のたのしみとならば。事阿逆ども。其文句定り  
たる事おし。たのれどもユウカルといへば。其風情相  
似たるなり。文字おなし。亦繩をむきびて用ふといふ  
事おなし。唯言葉にて次々お傳ふるのみ。又ハ頓  
作あるものも。直様かゝりながら。其文句をつくるも  
あり。かるがゆゑ。ふるき阿らしき。かくべつの譯  
を。たらまざれども。一言一句も虚言をばつくらむ。見  
聞たる事おし。なり。此國いまぞ開けざる風土おれ

バ。いそゆる神祇釋教戀無常と。種々ハ其のまじられ  
ども。自然とよハきとたさくる阿れば。つよきをバひ  
しぐち有り。又冬阿ハまぢかんぢる阿れば。禮の道ハ  
ちかの子事有り。をしつといふちあられども。まゝ惡  
しきをバよくまじらるち此あり。そのユウカルをき  
くおとよ。一章此うちよむ。心阿るちのほど。涙を催さ  
事有り。亦勇氣ふんくとして。いさぎよき文句有り。志  
りまじち。此國此言葉をよくまらざればせんなし。こ  
まよよつて。覺書小記也。今オサルベツの夷人ダ。ユウ  
カルをらゝるさまハ。淨瑠理此おときものなり。木此

みじりきちれをちつて。板などの音はる物とたくき。此音曲と催きみ。そのかゝるふしを。なみとあく長く短く。一聲を高くして。一こ急を低く。何をまはるとき。ち。おれま涙を催し。まといさだよき事などかゝる時を。板の拍子をげしくして。其聲を大ひなり。其ユウカル此文句も曰く。

タンバラロツノアシキネイバツク

サキネアン

オカニベコチ

今年より五ヶ年ほど過つるとし此事なる

ク。イカイシ。カリ。ウバツシボロウアシト。ウチヤウ。カイ

グ。十一月の半頃。雪の大ふりたる日。我が

ハンゲコタン

近所モベツ此ウシヤラエイ。ハシナウシの

サトニシゲ。ノヤウシのヤヨツクル。シモオ

イヒゴメキ。ウスヒイタラサラ。シヤキベツ

のヒナコロイタツイツンミクルオツカイアンといふ六人つゝオサルベ

ツのメガユキイが家へ来て。火をたいて咄ウチ

して居る所へ我等が行向チヤウカイオマンランシヨイ。オロツノウチヤをせて段々をな

しみ實シクマシヨンがい里オマンて来て。となりアルキハンゲ此サンバシウチヤシクマアルキアも

來て又夫カンナネアンベアキが弟ウチヤシクマアルキア此エサロトウンオクシシもをあしトウみ來た

里オクシシ。その日トウをメガユキイが家オクシシひて日トウを暮し

たり短き日の情あさむ。又夜は長きよてゆ  
ケ ヌニハ イラマシユイ ウチヤ シクマ。アベ  
 る里として。ねむしろくをあしなむら火の  
ウスカ シヨイオロワノ。オビツタ トラ。モユクア  
 消るふゑさぐつて皆とぞむみ。眠りたりし  
メアン クシヨ シキオブニ ハンゲ。ヌカル。メ  
 グ寒さと共み目さめて何よりを見まハメ  
セカチ カユキイグ子供ハキオウグ。三つみなりた  
ン。イヌン ミ。ハンケキイ。シヤンケ  
 るのろぶちハきをまてはり出して寐て居  
シヨ。オマレ。ヤイケブツテ。クシヨ。テ  
 るゆゑろハ中へ這入バ。けつとをさるゆゑ手  
イケシヤンケ。ネヘカチ。ヤ。ガユキイの脇の下へ遣

ニデ ユカツコノ チシ シヤニゲ ボロウ チャウカイイラム バツケ  
ると。志きおなき出して大お我等こまつた。

コタン ネ チシ ハルニシ オヒツタ ニキ オブニ アベ  
處ぐそのなく聲おみあぐ目を覺して火を

アリアン カンナウ チャヤシクマ シヨイ オロツノ ウバツシ ボロ  
たきつけてまゝ吐せしお志だいお雪ぐつ

ウアン サンベシケレ サン ベンケレ オビツタ イタク アン  
ちりて物はごくおなりたり。皆がそうたんし

ニチャツタ ウバツシ アン イシヤム ホクヨツク コイキ オマン  
て。明日を雪がやんだなら。熊とらみ行ふと

イタク アン アンド モク ネ ロノ ホシキ オカイ イシヨ ボ バツク ウバツシ  
いふて。夜は明るを待居まば。兎ほどの雪が

アシク シヨ ニ チャ ツタ シリ シヨ ン ノ ビ リ カ オ ビ  
ふるゆる急ふ明日は天氣をきつとよひと。皆

ツタ オ ビツタ ヌ チャ ツ チ ク コン アマノ シユ ケイ イ タク サ キ  
々々よろこび。さあ飯を煮やふといふて去

ネシイシヤモ イタシヤ バラキ クツラガイ オカイアン コメ

年日本人と取替たまふ俵よて貯へたる米

シヤレチシネベシヤンミバテキトウカツアアマカルクシヨアン

シベ サツ

を出し九人分の晝飯の用意なして鮭と干

テオカイコイキ シヤンケ サケイ サツテ セツ

て置たるを取出し何れも此干たるを焼

カ ネオロワノ オビツタ アマ イビルシイ

て夫のら皆々飯を食ひ扱夫のらモベツと

オカケタノブリ オマン ルウ ウバツシアシイ

オサルベツの後の山へ行道ふて雪をふり

シヤム レラ イシヤム アソクシヨ

メチマクテ クチリキタ

やむ風もなくなりたるゆゑ悦びて山へ上

イカサイ ニアタ ウハツシ アソクシヨ コタンカイキ オシヨラ クウイ ビラシヤ

り。岩の下に雪を七所かきのけて弓弦しか

シリク アイ クツトクノ ウダサケ イヘ

サツテ

イビル

け毒矢残をり何れも此の干たるを飼ふつ

キイ。コンタシベネロツノ ホクヨツク シヤンケアルキ ホシキ

けてさあ是からを熊とちが出来るを待計

バテキ。カシケタ アブガ シ オカイ ネオロ

里ぞと一ツ所ふよりあつまりたるが夫ま

ロノニワシ ノブリリキタキイアン クシヨ メアン

でもかせひで山へ上り業をしたる故寒さ

イチツキゴロアン ネブ ネアン キイニシヤ ヌカル

ちいとハぎ里しぐ。何もかも仕舞て見まバ。

ネメアン キイ ネフナ アナ イシヤム ホシケオビ

其寒さといふものを。譬へやうなし先皆の

ツタアイノ タシ ホ トオ モンムラ アタ ゴ

夷人ぐ口はいきみて。ひげみつらくのさぐ

ロアン。カシナテイケオム メイ ア ン ハ オ テ シヤム

るやら又手足があくえて自ゆうみならぬ

オトブ ヌマ ウハツシ コ オリ シカシ ナツケ キイ ヌイ ボ ロ シ

髪は毛の雪が氷て丸くなつてあまへ



タイケ アリカムウネアリカ オタイライシヤム ネアベクシヨオ

たりて痛えびまてみたへらまを夫ゆ急皆

ビッタイタクニシケ ノブリリキタ サツテニ ユイキアベ

グ言合せて峰へあがりて枯木枝取寄火を

アリアン モ ナタ ボフケコロ オシケ ト

たいてまむらくあたまりて居るうちよ

イマホシキ ウ シヤンゲ アンクシヨ イボツイボツクツコロシ

ふやく日に出みねまをまといよく總身が

ヘオケアンゴロ コン ホクヨツクノシマミヤンケ

自由してさあ熊を追出さふとヤヲツクル

と。ゴメキと。ビナコロと。エサロニと。イタラ

アシキネクル ブヨ オマレ サシキオカイ テイ

サラと五人を穴へ這入りて待て居よと手

ケイタク シヨイオロソノ アシネクル コカツフノ アツイラモアレラ

くむりみまたがひて五人を直み引まのま

イカリイブヨマレ ヌイナアン ボツバ イネイブクル

岩此穴みぞかく迷々る残る四人をメガユ

ノシケアン オシオシアルキ ハルンベ イタリ オリ

キイの先みたち續ひて來迷と聲残りけそ

ンズ イカリイブコネアンヘ セシケアン テイケイラモアンラ イン

あの岩洞かしこのしげみを手まけして尋

クン アンメイアン タラム トクネツ ゴヨ トイマ オホ

れども寒さよこまつて何あの奥へふのく

ヌイチ シヤンケイシヤム ネブヨ オマンテ ノシ

かく迷てかきるゆ急その穴へをひりて追

カンナブヨ チャブシ アベ アリ ネ シブヤ

出さふの又を穴の口よて火を焚そのけふ

アン ノミマシヤレテ カウ オビツタ コイキユイキ イタ

りみて追出そふのとみあのと里くみさふ

ク キイチヨウ カイレン ガイ イタク ニケン

だんしけるが我らお思ひはたみて木れえ

ケ トイシヤンケ アヨノシケニツロトロ アンネイ  
だをきり出して穴中へ押し立てた

ラツチ ホシビ ネ オロシビ ヌカル ホクヨツク

去づまりかへり。そのゆるぎを見れば熊が

トウブシヤンケ ネニケンケ ルラコロ シヤンケ

二足いで。その木枝を持出しくをへ出

イシムチセイ イコロト イマ オロツノ コ ケンケカンナシユ

し。外へもこぶゆ急速くより樹の枝。又石な

マ オマンゲ ニシケ アン ネホクヨツク ボロウ ホニ アン

どなげつちたれば其熊大きみもらとたち

トウブシヤンケ ハルンベ シヤンケ ハツク イクシタ アルキオロワノ

て二聲三聲ほえあがらむか。つてきたりし

チヨ ウカイランベ カマ キイカンナ アッ オマンゲ オビツ

の身ふるひをして。又穴へ引あみけり。みあ

タ オビツタ ミナ バツタ センナ シユラク サタン

くどつとまらひあがらまゝ寄集りて。いぜ

ノ  
ニ  
ケンケ  
ブヨ  
オマレ。ケ  
カンナ  
ハンゲアン

んの木は枝茂あついでまゝありぞひて

カチホクヨツクレイブシヤンゲコロラシヤンケ  
見て居まば又熊 三足出てをこびいだせ

カンナ。カンナシユマニ シケアン。トウブ。ホクヨツク  
ゆゑ又々いしなどなげ付れば二足は熊を

アルキ イクシタ。ネブ。ホクヨツク イテキ ランビカマノ  
ふげ込たまどむ一足は熊をなほくいゝつ

オビツタオカイカシケタ。又カルホロ。ハルンベ。シヤンケ。ノシマ。アキキ  
て皆が居る方を見て。大きみほえて追て來

イレシ。ガイイラ。モシカレ。オビツタオビツタイクシタオマン。キイ  
ゆゑ思はば去らばみあくふげいだしたる

ウバツシオホ。テケオムイシヤムカイルツケ。トイマノシマ  
が雪がふかく手あしがあゝえて遠く追ま

ウクロイシヤムアン。ニラ。アタ。アイノオカイ。ニ  
てまらあをせと木へ登るものあり木を

トイコイサカラニタ コロ イクニタタニズ

き里たるかまなさをあつてむらふもの

オカイオマンゲ ホクヨツタ ハイダブヨ アツケ キイアンオビ

阿里しぐ熊もとの穴へ引にみけるゆゑ

ツタシユラク アシネアシネ ウエン イレнгаイ キイカネ ラカ

皆打寄さてくおしひ事たたるぞや阿の時

スク ノシマ ホシビ ブヨ オマンイシヤム アン ケラフ

直お追かへせと穴へハをいらせまじもの

ツケ ライカラ カンナタレンガイ ケウトモ ホクヨツク ホ

をとくやみて又工夫していろくと熊おを

ニ アシ キイライヨシ ノ ホクヨツク ブヨ シヤンケ

らをたせしおをいぜん此熊穴より出て

テヤブニ アツイレンガイ ラモシマ キイユタニバ シユ

かみりるをのねてかくおの事なまじバ寄

ラク アツ ノシマ ホカニ バ シリク アイ キイ アシ オカイ カシ

てかつて追おを里毒矢を仕のけ置たる

ケタノシマノシマ。タレンガイ オマン ネアンベオウロノアルキ  
 方一追どもく。とこのくゆりびあちらへはし  
 タンベハケキ。ホシヒトナシノ。ホオ、ウハツシノシマイカリイ  
 里ああとへみげてふのくゆきの中みて岩  
 又イナイ。シヤム又カルオマンゲ。ヤカシニ。ネホク。ヨツク。又カルイシヤムア  
 のげみまぎれ入つひみその熊を見うしな  
 ンカラ。オビツタオビツタサカライシ。ホカンバホカンバ。イタツキ  
 ひたりみなくあきれてさまくひやうぎせ  
 イアン。イシタン。バテキトウホクヨツク。クラムトクネハカニナ  
 まどを尋まどむ。逆も今此熊も埒が有りぬ  
 ヒラノグヨ。オマンノシマシヤンケ。カン。ナレラノキイ  
 と。又別の穴へ行て追出さんと。又手分して  
 イシタンへオケバツクバテキ。ネン。ホクヨツクオカイ。コタン  
 尋まえる程あそあま聞ゆる熊の住所なれ  
 トナシノ。ボロウホクヨツクシネブノシマシヤンケ。ビリカビカ。又カルクチャ  
 バ。たちまち大熊一足追出しよく見まバ

ニアン

ラシムランムトイマオロツノ

クウ

キイオカイ

女熊なり。そろまくと遠くよせ弓を張置た

コタン

イクシタオマンケニシケバテキイラムシユイ

ホンノ

る所へ向てよせほめたる。おそ面白き。少し

シニイシユイ

オカケタヨカツヲチヤツケ

休度何とぞ直みかたる

扱其ユウカルをりさるゝる。文句定りたるもの

なれば。語里人かそりみ出る事なし。休みたく

なれば氣儘み休み。萬事我儘なるを。此國の風な

りけり。又そのかゝをらみてはやき事あり。別み

文句なし。唯オホツ々々といふぞりなり。是

ち二三人も過ぎりけり。其跡もいそぐ

クシベオロウノシヨイシヨイネホクヨツク。ソシマ  
夫より段々の熊を追る。とちなく。そる

くと行て見まバ。ひだるくハ阿るし又食ひ  
オマン。ヌカル。イベルシユイ。オカイイ。カチアマハ

もの阿るゆゑに能事おして食ひよか  
タンベ。オカイク。シヨ。ベリカキイアン。イベ。イセラシマ

るとそのまゝを称るもの阿るゆゑ何と  
クシ。ベココロ。テリテ。タン。オカリククシヨ。ネブ

なく心もまぬやうにちらへ廻りこちら  
イシヤムイラムバ。ツケ。ネアンヤヘオケタニ。タ

へまはりどなく出るうち文しちりしがど  
ヘオケ。シヨイ。オロウ。テケヌニバアン。ネ

うしてち食ひたくや阿りけん。彼阿めま  
ツブ。キイ。イベル。シユクアン。シゴロアン。ネアレベサケイベ



テイケニシケイビラ。シヤオカイクウトシ

へ手をつけると仕かけ置たる弓はつるの

アツテリケ。コカツコノホクヨツクツコロシゴウニネアシ。コロツユアンサンマ

をどくと直み熊の腰骨へ立とひとしくお

トキ。ラムトイバ。クラムトクネワサベシケルニヤンケキ。イウバツシオシケテ

どろきさまぎ埒もなく荒出して雪は中を

ム。オマンシユ。マアニニ。アン。ネマキバツチク。トム

のけ歩行石でも木でもかぢりやぶりてく

トイ。クシヨタン。オシケオビツタニバツク。リキタ。カシナ

るしむゆ急其内をえあが木へのほり又を

グヨ。ヌイナ。ケケヌンバトムト。イキイ。ボロウトムトイシ

穴みかく逃えしく苦しませて大がいつの

ンゲワソ。ホロアイノオロツノ。シマ。オケ。シタイケオクル

きたる頃大勢おてたひまはして打ころを

ブルオコロ。グヨヌイナ。アノオカイキイ。アシキネクルオシキ。

をづの處穴みかく逃居たりし五人の内ヒ

ナコロといふ夷人がひよつと出たるをクタクアイ、ラムリックニ手ニヤンケアニアクカバツチ

負熊を見付て。一つさんおかけ付て。一トクリホクヨツク、ヌカル、ヨロタオマン、オムニシケ、ニネブ、ネ

そへみかみかするを皆グヤウクして追かマキ、アニネマキオビツタ、サンベシケレ、キイノニマオム

けたるうち最早たまらぎ倒たり。むさんとアニオンケ、ナトナミノイシヤム、ライ、カタイルツケ

いふも餘り何里熊も今迄強りしお次第イシヤムイクニテク、ホクヨツクタンバツクニケケアン、シヨイオロ

みよえをておきつころびつ。逃をしるゆえワハブケ、オアニトリヤ、トウイクミタオマンレイブ

三人ヒナコロみかき居てのころ六人追クル、イビラミヤラカイ、ボツバ、イワンマクルノシマ

人おて追つまくりつ追まはしさしむクルクシヨ、ノシマ、トウ、ノシマ、ヘオケ、ネブカラユブケ、ホ

よき大女熊もさんじロ クチヤンふ打て殺し々ハシバラ シタイケ オククリオビツ タシタ皆打

よりてよろあべどもイケ ヌイヤツコクネブ シニ殊ふグびんをヒナコ

口ニキヌカニナオマン アルニキの命亦ひき起して抱きかテツチヨブツテへ見ヌカルまどもニキヌイ

いきシヤム アニの絶て々り疵をみればアラカ ヌカルかそいやあイトヤシカラ ウチカ臍

をかぢらきム ネマキ骨を折らまボウンネ バツナリク シケセトルトラブ オワツシヨト脊中ふ二つ襟首ふ

一つ肩シネフクケウイも一つ膝シネブ ホツカバも一つ數ヶ所シネブの疵ボロンノ アラカニふ

寒さメアンもつよしコブケ何へあハテキイシヤムきさライいおニキクシネアント目もくら

みウカツアママ、イブルイラム、イシヤムクニヨ晝飯も食コイキホククヨツクオ氣もなくオなりてオとりたる熊も

ビツタ コロレイブクルアン  
みあふ持せ三人してヒナコロの死ライグひを

シケオマン チセイイホシヒ  
脊負せてメガユキイが家へ歸ホシクネしホシクネ先其

ライ メイナアン  
死メイナアングひを埋めけり此ヒナコロの女房マチカリ

ニキチシバツクがなタツブネアンぎきの程道理カンナシイノコサンも亦氣の毒なり

タンベ ネオカイネアンホクヨツクルシ  
是ネオカイネアンホクヨツクルシを扱置その熊を皮裁コイキをぎて膽を取て身

アンウニジヨウヤバツクコロオマントイニヤンケネオシケ ウニジヨウヤバツクコロオマン  
を切出して其うちを運上屋へ持ゆきて酒

ベ ネオロツノハニゲトイアンイタニヤ アイノ  
と肉とと取かへて夫アイノのら近所の夷人を大ボロ

アイノオト イベルコロアンテキ  
勢呼何つめ雪のたのしみイベルコロアンテキふふるまひイベルコロアンテキたり

ネアントウオロワノクニネキイハケキオシケ

其日より夜よなるまでけうち大さまぎし

アンオビツタヌチャツコクオカイアーンケレビニマンラ

てみふよろおびたりし酒半ふヒナコ

キクブリオコロシヤンケタンドウトウカツヅギラムリテン

ログ事を思ひいだし今日の晝迄きげんよ

ネブキイイシヤムタン。チセイオビツタカシケタケンベイク

く。なほ事なくバ此やうみ皆と一所み酒呑

ウアーン。ネブ。ラムトクネイクシテクマチ

てといとが。かおしき餘りみ女房はカリ

チシブリウコロケンビホクラツクケラアーンイシヤム

キのなげき思ひやらき。酒も熊もまづくな

シネブクルイベイシヤムオビツタブリウコロイベイシヤムウチ

り。一人食祿バ。みあが思ひ出してくもど

ヤシクマクシヨトラノトラフチシクルイシヤムアーンイシヤム

なしみなりてとむぐみ。なりぬ人こそあ

シヨノネチヤツコクラムリ

ランイシヤムチシイ

里々れ。あつみたのしむみ阿いそなくあき

タクウシヤ シクマゴロアンネニ。アツナヤボ ネブ ネマキ

物語里みなりた迷バ誰グおやをいつくそ

迷。 ネニヘケチ ネブ ライ キイニ。 シヤ レ タレ

迷。た迷グ子ハいつ死んだとつひみあけ

シネブ ハイ ダ トウ ブ ハイ タ ボツ バ タンド ウク

て。ひとりへりふさりへりのこるを今日の

ルバテキアシ ネイ ブ イ ニ ヤム ベ ケン オ カイ キイ アン

つ迷むありせひむあき世比有さまなりか

ンバ タ チ ヤツ コク タン ネ キイ オン ナ ニ キ ビ ノウ ウ キイ オ

る樂しむ長じて冬又あしむみなりゆ

マン フ シ コ ウ チ ヤ シク マ ア ニ ナ ニ ゴ ロ ア ン

きてふるきをあしとなりみけり。

又女比聞布のふ。シヤコロベといふ音曲有。日本

の豊後といふやうなるものなり。シヤコロベの

文句 面白いぞ。

ふるきかさりつとへみのこりしをフシコイ タクニ シケアン今まホツバウコロ トウカニナ

こゝみをおほなりと。ある所のひとタンベイ タク キイ里むコタン シネツブ トリン

め。ヤイノカゴ事なりキイ アン々り。子供の時ヘカチ ボウよりビ

つくしく。ちのらユブ ケ シイ ノ ユブ ケもつブリウ ユロ アンよくヘカト。氣ボロをニよくアイノ ヒリカ ケラ アン キイ シカリ。 ナト ナニノ アイノ マチ生マチ多チ

くニ此人アイノみほヒリカめケラ アンらキイまシカリ。たりナト ナニノしアイノぶマチ寂マチ早マチ人のマチ女房マチ

みサンヘンなるバラ頃キイみアンなりハイダてタンもインさヤムだキイまるキイ夫子も子なし子

アン オカイイカン チヤ、インカイ アツ ウコサ。ネタン  
 何る世間のおやれたためふかたるべし。さて  
 ネトリン。サキネキイアン。ネ コタン。ネアンベ。タン  
 其むきめ年たけなれば。その所此ちのち。此  
 コタン アイノ イングレ アン。アシキネフトベシヤンベアイ  
 處此ちのち。りらひたごり。五人ち八人ち。の  
 ツ。イゴレ。トウグ。チヤ、 イトヤシカラトリン。アン  
 そむゆゑ。二人の親ちかえゆきむきめあま  
 ヤヨマブシヤンケ アン。クシヨネイタオマンテ  
 どち。うらみご出来み依て。何方へちやられ  
 ぬ。アイノ イングレイシヤムヨシ。イシノ チツフ。オカイ。チヤ  
 子づまひて。その近所なる。オサルベツの川。ベツ  
 ン。カチアノオマン。ネ。ハンゲキイ  
 の落口へ。鮭取り出たれば。ハシナウシ。此夷。アイ



人サカンマチといふとのちまゝ鮭取里イタクオツカイ。カンナユイキ

行阿をせをじめて見合たごひオマンランケ。アシシナヌカル。ヤニナヨウカイイレニガイノシケ

とをたりたまきとちいまご親々タキイ ウコロクシヨ。ナタンチヤ、チヤ、ケウニトノ

ば。さしてあるけしき事モナククシネツノアチキキイシ、ナヨツラ。オサンカルク

る折ららふ此サカンフィンベオロツノタン。マチイニングレが親チヤ、ネキイヒリその事をよ

く聞てヤイノカをカネンシ。もらひイニングレゆきたまオマンカシタカ。ホシ

へ方よりビちらひ人オロワノイニングレアイノボロシノハツク。ネイタの多きオマンゲサツカゆゑいづ方オマシへち

つオマシのオマシをオマシきオマシしオマシ

アニ。ネタンネカニナ。アシリ。イシヤムキイウクロアニ。オ  
りどそきて冬又をてしなき事なるぞとせ  
コベ。インゴレ。タンドウノシケ。ヤン

サワ  
ひもとらひて其日のうちヤイノカをつま  
アシホシビ。ルウオマン。シネツブ

て。ハシナウシへ立かへる道をざら一人の  
アイノオマンランケケラシ。タンアイノ。ヨシノ。ヘンバラ

夷人よ行逢ふたり此ものも。まぎしころ。ヤ  
インゴル。アシ。アイノ。アンラカイウクシ

イノカを。とらひかけたるものみて何をし  
ネヲロベシ。ネン。ヘトニインヤム。ホニ。イレングアイ

づ。そのやうきを聞て。唯ほ以なくや思ひん  
シキベノウモンム。ハルンベリキタ。イミコロ

ん。なみだをなごし聲を上ヤイノカ。の袖を  
トシテクタツブ。ネアンチキアイカブノシ。カタイルツケ

ひかへ。なごりを。おしみるゆる。なさけあ

シヤムアイガブキイ。ホシケホシビトシラク。アシシナオンネレ

くもあらばして先志をらくひりへ志じうのな  
シキノ。又カルネンニシケ。イトヤシカラオカシマ。ネタンネバツクウクロ

げきを見聞みつけて何をせを催しそ進程心残  
ホツバヨシ。チヨウカイ。イボツエイ。ヤニオロツノ。ハツク

アハらば我子サカンマチみかたりて貴様も遣  
オマンデトシテクニシケアンテキ。タンアイノシヨシケ。アイカブキ

したしと云けまども此夷人ひたまらみ志たい  
イ。オロシベアシイヲモアレラ。キイ。オカシマ。イトヤシカラアイノタン

して終み立まのれり事み何をれハ此夷人物  
シシゲイレシガイ。トウトウ。シヤツケウマヤイケオカイ。アンゼヒ。又

々しく思ひ日々もやせねとろへて在けまバま  
タキ。ネ。アシオカイカシナ。テ。又。ブ。イ。ク。ウ。

くら元ふ。クワサキを立をき又いけまどのませ  
エブリコをのせて。いろくまれどむなやらざり  
ヨ。ネヲカシマ。ネンニシケアン。アラカイシヤムクシ

けりと此事を聞つさへハシナウシのオトナグ  
ルラニシケアン。ネタンネ。カ。の。ヤイノカをつま來り女房も

をりらひみてかのヤイノカをつま來り女房も

インゴルオカシベ。チヨツブノシケタバテキセチイ。シエイビリカ。  
くまけれバ月中むのりの内み病な不里て。  
ラムリテン。インロデイ。ウコイビシ。  
嬉しきうき世をねく里々り。

先大概を志る此のあり。その外シヤコロベといふ  
る。豊後ぶしといふ風情にて。多くを女子供のよろこ  
ぶと此なり。まさしノツキヤといふもの。何となく  
ちよつとしたる。鼻うさといふやうなるものなり。シ  
ヤラシケといふもの。二人おても十人おても。一口  
づゝかけ合ふ。思ひくみ云つぎて。唯俳諧のつけ合は  
ぶとく。其一言おつぎて。いろくと當坐の間おを

せざる音曲なり。又身ぶりといふやうなる風情ありて。ふし裁つけて。うたひあぶらたどる事と。シヤコロベキヤツケといふ。是も何といふ事なく。出ほうだいふ。音曲とたどると合せて。たのしむ事といふ。上手下手も。ふしと文句よめるのみよて。聲れよしあしよてるまはざりしとなり。是ぐまてよく出来たる文句を。所々の夷人聞つと。かさりつと。いみしつ。の文句のこりたるあり。たどりなど。日本此たどりと。大ひに相違して。唯間のぬけざるものよして。一躰人物かをりたるゆゑよや。めづらしき事なる。蝦夷見聞誌

渡嶋筆記。ユウカリといつるもの。最舊く尤巧まことにして。其國風とも云べきものごとし。そのさまたゞ物語よして。かゝるふふし。找あつけたり。是找聞てあ聞まらざべき。あらび。是夷語よ。あらをあざるもの。みよあらび。あむし夷地よ。往來して。大抵通辭ある程。此ものよてあたし。あよ聞兼る故。此謠物よ。限りて。平日いふ處と異ある言葉多し。とぞ。あむふよ。極て古辭雅言を。專よ用る事。篤りあし。故よ。渠あれよ。よく聞まらつなり。そのかゝる所の一段落を。戯よ譯せしむ。富たる長あが死し。其子人あれ家よ。寄宿。其ほとりの

濱よて鯨を捕たり。其所よ主人が親族有ける。それ  
が許への此僮をゆりて膏を乞しむ。僮此時心よ疑  
ふ事や有けん。速よいらへむせせして立たる。主人  
怒て汝もが家よ來りて人と成。何よ泣けてもいと  
ほしみふりく。衣類までむ見苦しからば着るあら  
せや。然るよ今日よ限りてかゝるふるまひこそ心  
得祿と云よぞ力なく出行たる。こ逆實を鯨の膏を  
乞よことよせてかしこよ遣り。親族が手銭か置て  
僮を殺し。彼が父此秘藏せし寶銭奪をむと謀るお  
り。僮をさきの家よ行到るよ及て。始てかゝる企所

る事を明らふ知たり。驚て遁出てた途と。日暮路を  
志らば。纔なほ一家を求めて投宿しけるふ。此家此主人  
を。僮わらわ父の友よしして。その女を僮わらわ幼時より。父と  
父とが約せし妻よめふあきべきを此なる事我語わがことひ  
て。思おもむを知たり。女を僮わらわ名なをありハ聞知てあ  
り。同郷此何某なにが。僮わらわ主人と謀て殺さんと云るよ  
し。此たくみハ。此聞て救えんと云るふ術わざあく。心  
のみいさめしが。不測ふそく難がたをのが途みち來り。邂逅ぐわいごせし  
まふ。路みちをを教へ。心こころの及およぶ程ほど此支度しだとくのへ。古  
郷へ歸しやりけるゆゑ。辛つらふして家いへに歸し。



と云迄此處あり。おれより互に讐を結び。戦鬪し及ぶ  
事し至るよし。其二を。ひのきまはる。おれより。のへ古  
余市と云處此長。人しを用ひら連家寶も多く持た  
るが。死して女子一人男子二人あり。石狩此長。醜を  
設て三人を招く。初を疑懼れてゆゑざりしが。再三  
此使し及びんれば。今はいかみ難し。然れども嫌疑  
を懐あゝら。三人とをみ行むを。浅慮なるべし。二人  
をゆくべし。末の弟を留りて家を守まとして出行。夕  
ふいされど歸らば。待あゝせど歸り來らば。明る朝  
までも歸らぬさへあるふ。何と音信までも絶てな

きを。いのある難ひ逢ひぬらん。姉兄此我も止り  
て家を守れと有し。今ハなどの往て見せふや  
むべき。かくまで歸此遅きを疑もあく。危難の中も  
おそせむと。神などの夢うつゝの告有よりも。猶  
明らなる。いざやとく親が世よりも。其前此代々  
より。秘藏せし太刀鎧弓矢やあぐひ火打袋。さま  
の身此護となるべき。シヤモ此國より渡りたる。神  
々の愛させ給ふといふある。寶物を數を盡して佩  
たるまゝ。出立の勇々しとちかひ。しとち。詞も  
さらふ及む。我家出て石狩此方も向ひ。イナヲ

を取て神を祭り。鳥よりも疾く熊より猛く。翔り走り  
り行て見まは。二人を果して衆中より取籠らま。難義  
よ及び恣なる事哉云掛られ。打擲よあひてせん。の  
よあし。既よ危き所なりしかむ。佩たる太刀拔。多勢  
を伐散し追拂ひ。二人を救ひ出したり。石狩も蝦夷  
第一の大邑なれば。此を以て蜂起し來る人數。雲霞  
此如く。弟一人を圍みま。弟勇哉振戦へば。近づ  
ものもなき處よ。敵此中よも青年のよく出立たる  
がありて打てか。る。今よはまの掛り見まよ  
此等の所勇壯の有様。并よ前よ見えたる。僮が女よ逢

ひて。難をたがれし處悲喜其情態あど。さまぐ。此文華  
を添ることのよし。

弟が勇か迷ふ劣子をあら祿ど。數刻戰疲れたる故  
よや。過て蹶き倒るゝ所を擊ほどし。此時既し危か  
し。我。弟をよはは祿ならぬとのあれば。そやくも  
身我避け。よく打拂ひてをもや戰を好まぬ。漸遁  
て三人とちみ我家に歸す。此上を同郷此人々我か  
ららひ。よせ來るをやまさん。逆よせもやせむと。石  
狩大軍なるべけ進む。戰ふなりあむ。迎も勝事思ひ  
もよらび。先がけして死を決せんといふ。姉頭を

ふりていやく。石狩と我と。大に懸隔なる事をいふ  
ふ及ばざれむ。初より能志のらざることを知りつ  
し。殊更ふ死地ふのぞむこと謀れらむ。おこしらひ  
男あまむ。左やうふけおげふいへど。詮なき軍して  
兄弟ともふ命をおとし。親の跡たえは悲しかるべ  
し。其時を家の寶も。敵に心はまゝふ取去るべし。一  
且の怒を去れむ。よせ來らぬ前ふ。寶を抱き山中ふ  
隠れよといふ。両夷聞かむ。遁るとも。まゝ其山へ來  
り迫らば。遁べきのを。只先人此名をおとさぬふる  
まひあをといひ罵る。爰ふいあなる姫ふの。家ふ久

しき老母あり。初より側み打聞て居たりしを。さし  
よ里てかゝる時の謀らひを安らね。此事  
らをも任せ給へし。郷人をむ煩もさき。寶も人手  
みまゝさき。君たちも身命全き謀あり。三人共人々  
を任て。暫時山ふかくれ給へ。家も我一人とま  
り。爲何しあらば計ふべしとて。強て山へ忍むせけ  
り。石狩もまゝ。此事も評議をこらし。彼等三人  
ち洩して返したれば。余市が一つも集りて。責來  
らんも必定なり。その備をやせん。先たちてこゝ  
よりや押おせんと區々なるが中も。一人肩さしい

のらせ進出で。彼小郷なればよきるとも。素より恐  
るゝよたらび。志のきども敵の情を察して。おれよ  
應ぶる此備を設らん事然るべし。まづ二三人をか  
此地よやり。窺をせて後よ。おと商議をべしといふ  
よ定り。二人連てゆき向ひ。余市近く立入ても。其邊  
よ兵備戒嚴此様子もなし。それぐ宅此側よいたり  
見ても。寂として人此集まるる足跡も見えざれば。  
さてお山つや遁入たらむと思へば。屋上より煙も  
立のぼれば。人おしとも見えぬ。いのおよやと窓より  
そとさしのぞきたれば。兄弟も更よ見えぬ。阿やし

き老嫗一人。爐邊ふ踞たり。其躰たらく哉よく見  
まば。眼の光る日此如く。白髪を秋の山此枯葉の上  
ふ雪此降り積りたるが如し。面此皺る冬此海の志  
ら波の幾重も立おこるがごとし。口此もとの黥此  
残たるハ。岸打波此上ふさし覆たる出岬ハ。夏此草  
木のおひ茂りたるが如し。鼻の穴此うちあきたる  
さまハ。石山此洞ハ鹿が角振立て出入するもやは  
きこの如く。長く息の火焰をなすハ。焼山此灰哉飛出  
ると疑まぬ。さかづらはあまの形も人なまど。見まば  
見るふまづがひて。あくまで常人ふも違ひたる様



子思をき。身子志みて。懐しく。一目見しより。復目も  
そあされぬ。見はめ居る子。更子身比毛の立て。唯芒  
然として。志むし。イみたり。扱日もくまぬ。いあふせ  
ん。さあふ小人はて。阿れば。我々が來りて。動靜を伺  
ふと。あよむ志らむ。宿を乞むやと。て終り宿りたり。  
嫗を疾く。彼等が遊偵たる。ふとを知ぬ。宿貸たさば。  
態とよく。あしらひ。さて二人。ふ向ひ。けふ此家此  
主を。かゝる。又けふて。宿よを。阿らぬよし。實をもて  
語り。それよ。はけ阿祿を。殊ある美人なれども。未定  
る。婿なし。阿を。れよの中よ。よ。記男。阿らむ。婿となし

大きき事あり。さ阿らバかゝる時此カ子なるもの誰  
りこましまさる人あらむや。むこ子を家此寶盡く  
譲り與ふべし。此家此寶といふも。アイノの國も志  
らぬものもなき珍重の物多し。されバ他此大郷の  
何くらからぬ長達さへ。事次構へ謀慮と費し。奪を  
むとちたくむなりあど。細々と語り。君等皆たのち  
しき人とハ見たり。二人此内一人を幸子婿と成給  
へるし。と姫ガかく打解て物いふさま。いゝおむう  
るはしく志さしく。又いおといをも。只人ならぬ形  
相なれば。吞やせん。嚙やせんと。悞しく。旁希世の美

人を妻とし。希世此寶を得るハ。心よおひて者とむ  
 る所ゆゑ。法ひよ一人が我こそ婿よならめと云た  
 り。それより兩郷此讐を解たるといふ事なり。

此等奇語狂論をまこといへども。元よりなき事を作  
 らば。彼が性質意氣任俠を好み。寶を貴むとかく此  
 如く。其國情を察すべきも足り。亦文章事狀を形容せ  
 ると。頗巧なると一奇なるべし。故に繁きを厭む  
 ぎして去るは。又東察加茂攻たる事を作りたる段も  
 有よし。去きをかざるもの必僵卧し。手よて心を撃て  
 喉よて呻吟せる如く。嘔噦せる如く。去る聲よて僧此

經文を誦するよりを緩みして。猿樂に謡をうたふよ  
うを急なり。聽者ありの聲を發し。叱する如く咳する  
如くあまねば助く。まゝイクバシなどを執て席を擊。拍  
子残とりて其感激の所みいとりてを。同音み叱し叫  
て響。此ユウカリといふもの。られみありてを殊の外  
み面白きおとのよし。ユウカリを。善かたるもの。冬み  
いとり漁獵の暇。あるひをたぐひみ招られて。暇日な  
き事なりとぞ。其勇氣憤發の所を聞てを。覺を聲を發  
し。負まじきぞよく戦へよ。既み讐を刺。怨を報るみ至  
りてを。よくせしぞけあげなる。あらうきしいさぎよ

しなどいひ言り。又難を經身找苦るしめ。志とくたし  
 恥を忍ぶよ阿ひてを。女子輩噓唏流涕悲哀禁せぬ。俯  
 して。面を阿ぐる志とあるをば。亦シヤツコロベとい  
 ふもの有り。こまユウカリの變風よして。ユウカリよ  
 比せられ。和らうなる物なり。唯男女好色戀憐の情を  
 ありをつま。またるまで。よて。戰鬥義勇等の事なし。お  
 まも臥してかゝる。ユウカリ源義經の事よいりて  
 へ。殊よ古調なりと見えて。其聞得かゝき所多く。聞得  
 て事跡連續せぬ。まゝ始終全く覺たるを此既よ稀な  
 り。

千嶋志料

東嶽冬 ○淨瑠理をかゝる事

日蓮上人著

上川郡は土人。淨瑠理といふものとかたむる事あり。其淨瑠理のさまをきくふ。往昔天鹽國増毛郡の高山雄冬に於て。大強のメノコあり。常に魔術を志り。空中に上りて法を行ふ事あり。其のメノコ上川郡にて沙流郡の土人と争ひしとき。既テラカマイに義經渡り來て。辨慶が彼に大強のメノコを投なげると。それより義經を彼メノコに養子と成り。如何なるものか巻物をメノコに渡せし後。魔術消滅せしと云り。偕淨瑠理を聞土人等も尤謹まむ。辨慶が彼大強のメノコを投る場ばに到ると。土

入悉く平伏すと。上川見聞奇談

夷人のシラカシといふもの。能和語も通じ能く話を  
なす。物の名を尋る皆和語にて。夷人其内三人。浄瑠理  
を語るよし。因て酒を與ふまばよけさび。一人仰て卧  
し胸を叩て謠ひ出し。二人を薪みて拍子をとる。祭文  
此ふしよ似たる様なり。通辭のいひしよ。前よを多く  
義經公の事此み謠たり。近頃を新節をりて。種々の  
事を作りたるよし。谷元且蝦夷紀行  
土川河○踊の事  
東海參譚よ。島牧よ泊る。中略四日逗留。夷人等よ清酒濁

醪をたふ。濱に四行に並居て是を飲む。みち酔て撃  
 壤の舞をなす。女夷も亦一群して踊る。散髪文身此女  
 夷等の酔興に舞ゆ。急其風情抱腹に堪たう。唱歌をヤ  
 ツチヨウタ々。ヘイロウタ々と聞ゆ。ウホバとハ。音頭  
 此事。サカヤウとハ。歌の事。ネウシヤレとハ。舞遊の事。  
 シヌツサとハ。慰む事。タツフカルとハ。左右此手を出  
 して踊るかさち。此辭を座上の老乙名が。酒を賜ふに  
 依て斯せよと。以下の者共は差圖をける處なり。千嶋志料  
 ○狐踊の事

渡島筆記に夷人何といふりきあび。和人見て狐踊と



名づくる戯あり。猿樂の狂言此類にして。狐が人よ化  
 て。貴人此館よ至り。ユウカリ哉かざるを。犬知て吠  
 るよ。愕き忽尾哉あらをし。四據して逃めざる。犬の  
 まねを告るも此二三人あり。同じ様よ出四據して。其  
 尾哉くそへむとせ。狐よ成たるもの。已ぐ帯を垂て尾  
 となし。犬を曳てとらまじと逃るよし。逃て尾とく  
 そへらまざるを。狐此勝とせ。謬て尾哉くそへらるる  
 を。犬の勝として。犬れを笑とせ云々。同上

○へ千りの事

へ千りといふ戯有。今年御救交易。宗谷よて蝦夷人介

抱等有之。當所産物の海鼠引ひ集りたる夷ども。先宗  
谷濱邊ひ丸小屋ひのけ。會所ひて種々交易此品を前  
かりひるひ。おろくひ酒をひり日和待合の内ひ丸小  
屋ひて酒盛をなし踊り狂ひ。酒興ひ乘じいろく戯ひ  
をなひ。おのひチリをひじめたり。おのひチリとい  
ふ元唐太島の踊ひて。西蝦夷地ひて。斜里宗谷天  
鹽まで踊るなり。手絃拍掛聲をして。おどるひ振有て。  
十人十五人乃至二十人男女雜り。順列しておどる。伸  
ておどり。縮みておとり。拍子あり間あり。おとしひき  
おどひりて興有ひとなり。最初ひくるひくと。輪ひ廻

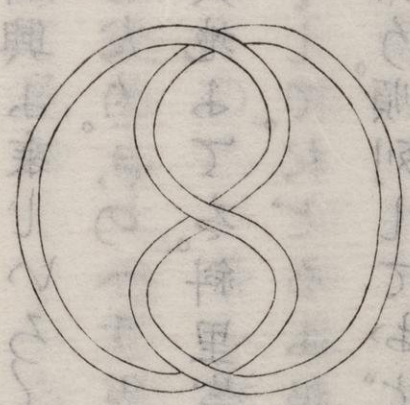
調子揃ふはくくおひ圖の六とく廻りてねどるな

り。上手なる蝦夷先鼻ふ立。夫ふ従ひ踊るあり。  
夷諺 俗話

へ千里踊歩行の圖

此輪の通りを。幾度か

廻りながら通るあり。



○舞の事

蝦夷どもとよびてなぐさめんとして。やどり共まへ  
ふむしろと敷まゝして酒のまほるふ。おとなども

あいなみて。えも志らぬこといひつゝ。たごひも志た  
むねなるが。かみもあましおとあまなるおきをと  
まて。こぼるゝむありうけ。酒神を祓んぶるやらむ。そ  
しちて酒をたむけて後。髭といくむしといふれし  
て。りきあげてのむ。はぎぐ末へあられ。まゝのみなる  
おとあむくゆ。うたまどちみあらしろふはどひ。月  
を拜みて立なごらのみ。あるひもひさごとてみづあ  
らくむあり。やけうみ入たるよや。志もあるおと  
な。ひとりたちて。うたひはまふ。いなる猿樂まざ  
をやせらんと見いたるふ。おとち舞世さま。おゆひ

しよりハおほど有あり。かゝをらなるものハ。たゞ手  
残うち拍子とりてこまをたたく。うたを判官殿に  
おんじきのつむさの鷲をたひて。くるむせといふ國よ  
まさりしおとをつくり。舞を鶴の羽とのづて空よま  
よまほびなりとなん。堀田正敦陸奥紀行  
てんぎ○戎舞の事  
納紗布の土久。ボンドンといへる者と。戎舞をよく舞  
よし聞けば。是を乞しよ。一同のち一樽の酒よ興じ。  
樽底叩きて。ミトサイナ。ミサイナ。戎舞をミトサイナ。  
と云囃子立るや。テニキと云草よてつくりたる。小ざ

きふごの様なるものと烏帽子となし。余が羽織を乞  
けるゆゑ貸たれば。其は跨り袴となし。干鯉を抱へ釣  
竿肩よして舞始め。種々其所作仕舞て後。其釣竿と櫓  
となして。舟漕歸るさまの真似をおま事。實は奇と云  
べし。納紗布目誌

○槌打鶴舞の事

御代替の巡檢使を。松前より西ハ熊戸村。東ハ龜田村  
と堺て。是より奥蝦夷より行ざるが先例なり。各松前  
より日本道三十里程づゝ隔つあり。此兩村ハ蝦夷土  
人大勢群集し。槌打と鶴の舞と興行して。巡檢使を

饗應する。先規の定例なり。槌打ハ男の業。鶴の舞ハ  
女の業なり。其槌打々數多蝦夷人ども。東西兩方子等  
分り別れて。日本此角力を取前ふ。土俵入の力足を踏  
む。如く。大勢の土人東西より一時出で丸く立  
並び。一躍しネ跂ながら。一步づ。拍子と揃へて。力足と  
踏み。一周り廻る。此時ゴ、キセとて聲を揃へて。喃ホウ  
々々々と云て拳を振り。臂を曲て二の腕を肩と平ら  
み張り。臂内廉よて脇の下を打あがら。躍り上りは  
糸上り打なり。其勢ひ雉子のほろくの羽打が如く。躍  
り跂る。如是し圓く一周り廻りて力足を踏み。互に勇

氣と見せて。東西ふ元の如く引退くなり。夫より東西  
より又各一人づゝ出て。打つ者の槌をもち。打るゝ者  
を手を振りて。互ふをうつと立より脊を打あり。打者を  
槌を持って躍り上りはね上り。勢ひかゝつて。槌を振り  
上げ走りかゝつて再ひ打なり。又打たるゝ者も。打者  
の遺恨を残さば。互ふ弱りたる氣色。見せしとて。躍  
り上りを祓上り互ふをぎまらひて。力足を踏み入代  
り立交りて。東西ふ立並びたる蝦夷人。残らば打合な  
り。是槌打れ法式にて。昔より此定例あり。扱又天氣祭  
り風祭りと云事ありて。此槌打を祈禱ふ興行せる事。



是日本の在々よ産神の祭禮よ。相撲を興行せるよひ  
 とし。此槌打を松前よてツチウチ。蝦夷よてウカリと  
 云なり。とろく重き祝儀などよ。是非興行せ祢バ。此ま  
 ぬ事よたちよ。蝦夷地此風儀よて。私ならざる所あり。  
 鶴の舞といふ事あり。是ち前章の如く。とろくよ興行  
 是。是則蝦夷女此躍なり。其体中腰よなり癱スヅり膝をか  
 けめ。一足スズ跛よびんくとは祢あぐら。兩手茂目八分よ  
 かざし。其形耳垂犬此耳のたまさるよ似たり。前へち  
 はね。後へちを祢。左右へちはねとび。勇ふ勇さんで聲  
 と發是。其聲の舌と巻とろくくと云てハ。は祢上々々。

五人も七人も。其數定らざ。向ひたる方へ向ひて。亂み躍りは祢るなり。其さまいりみち一群の鶴は遊びひるるく形よ似たり。あまは鶴の舞は体なり。蝦夷草紙

○メノコシノチの事の例は十人なまきば。五人宛東西を分き。高さ二尺をわりりは木を地に建て。五人はうしろみ圍ひ。彼方五人の内より一人出て。奪ひとらんと争む。此方をとらまじと争ひ。取り出たる一人と。五人をてからきめを合せ。疲る。時を彼方五人は内より。まと一人出て。あらそをひとらんと

は。とり得たる時を。其取得たる方の後。圍ひ。五人。よ  
て。是を防ぐ。是を昔。女。戯。奪合し。ふる事なりと。今をそ  
れ。よ。準へ。戯。よ。な。は。の。み。夷。諺。俗。話

○アカミチウの事

アカミチウといふ事を。アカミを輪。チウを差と譯し  
て。是をセカチの戯。よ。な。は。事。よ。て。うつ。を。魚。鳥。と。突。稽  
古。なり。竹。を。以。て。差。渡。し。五。六。寸。の。輪。を。お。し。ら。へ。人。ご  
と。よ。竿。を。持。一。人。こ。の。輪。と。虚。空。よ。投。る。落。る。所。を。お。の  
く。竿。よ。て。あ。ら。そ。ひ。突。なり。つ。き。止。さ。る。もの。其。輪。と。濱  
邊。の。砂。此。中。へ。か。く。は。その。隠。し。や。う。あ。く。よ。出。る。りと

おもへば。飛をふれたる處。手品よく氣付つゝの奴や  
うも埋むなり。それとあらそひ尋出せと。興となせあ  
す。夷諺俗話

○ニイホケの事

ニイホケといふ事。ニイを木。ホウケをえねるといふ  
事。是を戲まざなり。東蝦夷地にて。これとク  
ワイホウケといふ。クワイを枝といふ事。是こし  
云様のかちるまで。て同事なり。是を繩を長さ五六  
間。よして。兩人。よて左右。よ引張。高さ三尺位。よして持。  
夫と一人。捧をちつて立向ひ。飛越れば。まゝ一段高く

して持。又そまを飛越ま。次第も高くして。高さ一丈  
むうりも成と。自由も飛越るなり。夷諺俗話

○トシ、ユエといふ事

トシ、ユエと云々。是も長さ六七間の繩と。兩人もて  
繩のをし左右もてちち中とたるめて是をまをしな  
ぶら。地ををさうくとうち。一人その中も立。繩もから  
まぬやうも。前後へ飛越るも。後もを横も成て。片手片  
足もて面白く飛越る興なり。越るものトシカウシと  
いふなり。夷諺俗話

○テリケといふ事

蝦夷ふを奇妙なるたをむきあり。名つけてテリケといふ。男女うちまじりて。ヤア々々といふ聲一同よし。て。其中ふ聲のきれめあり。そのをづみふ勝負此ある事あり。まづ二人して繩のをしを持つて。其間九尺許り引のべて。其繩此中ほどたるみさる事。地より七八寸の間なり。扱亦一人かの繩の側ふ立て。みふ相とちよ手をならして。ヤア々々イイ々々。ヤア々々とをやせ事。六七度ふねよびて。聲のききたるはつみふ。そのなを踊り越て勝を得るなり。まゝ其繩のをしを持つたる夷人を。かのを祢越る夷人を。直ふ引倒し事をむね

として。たくみのごとくなりゆけ。負マカしたりとして  
 よろこぶ事なり。是阿やしき遊び事なまきども。さして  
 大ぬる阿やまりなし。唯身のかろきと。引との、早業  
 よ阿る事とたのしめり。かの琉球國は踏端曲といふ  
 ものよ似たり。此踏端曲といふものは。板の真中へ高  
 く臺とわきて。二人してその板の上よ阿がりて。兩方  
 へまられ立て。片々の人たどり上りて。かの板の上へ  
 落るもづみふ。こゝろの一人まゝを祿上らまて又落  
 る。そのもづみふまゝ片々一人を祿上らまて。あゝと  
 る事數度ふ及んで。段々と中は方へ寄り集めて止む

といふ。志の曲を唯身此かろきと。總身のそあへ真直  
みして。ゆがまぬ事を所業と志たるものなり。此曲と  
阿やふき事を相似たり。かの琉球を國開けたり。蝦夷  
をいまごひらけざるの地あり。此相違阿逆バ。かの踏  
端曲より出来たりし曲なり。蝦夷見聞誌



蝦夷風俗彙纂後編卷五終  
 此曲也。出來。計。と。曲。計。と。蝦夷。良。間。舞。人。あり。兩。方。  
 よ。の。ま。を。ひ。の。け。な。る。の。歌。さ。の。此。歌。舞。の。世。に。心。の。解。  
 可。才。よ。を。奉。ふ。財。物。計。の。女。の。飛。和。本。國。開。け。才。の。歌。夷。  
 も。上。下。の。心。を。必。事。を。神。業。と。ま。た。る。水。の。歌。也。此。曲。の。

